琉球大学学術リポジトリ

幼稚園での動物飼育体験を通して考える子どもの発達と保育

メタデータ	言語: ja 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2023-04-05 キーワード (Ja): 動物飼育経験, 幼稚園, 子どもの発達, 保育 キーワード (En): 作成者: 中尾, 達馬, 勝連, 綾 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002019695

幼稚園での動物飼育体験を通して考える子どもの発達と保育

中尾　達馬[*1]・勝連　綾[*2]

Child development and childcare through animal husbandry experiences at kindergarten

Tatsuma NAKAO[*1] and Aya KATSUREN[*2]

要　約

幼稚園で動物を飼育することの意義とは一体何だろうか。本研究では、研究１では、沖縄県北部の公立幼稚園４園、沖縄県中南部の幼稚園３園の副園長や主任に対して個別インタビューを、研究２では、大学生83名に対して質問紙調査を、研究３では、小学校教諭１名にして個別インタビューを行い、この問いに答える試みを行った。調査の結果、以下の２点が示唆された。すなわち、(a)　保育者は、動物を飼育することを、設定保育という形だけでなく、日常的な形で保育へと活用していた。(b)　動物とのかかわりは、子どもの生き物・自然への興味関心を高めるだけでなく、子ども同士の情緒的交流を促進する役割を果たしていた。幼稚園で動物を飼育するということは、安全面、周りの環境・生態系への配慮などから、絶対に実施しなければならない、というものではない。ただし、保育を行う際の一手段としては有効なものであり、また、小学校の理科、生活、特別の教科　道徳では、動物の話題は必ず登場する。そのため、幼児期に動物とのかかわりという原体験・実体験を何らかの形で積むことは重要であるのかもしれない。

キーワード：動物飼育経験、幼稚園、子どもの発達、保育

Abstract

What is the significance of keeping animals in kindergarten? In this study, regarding this question, in Study 1, we conducted individual interviews with kindergarten teachers of four public kindergartens in northern Okinawa and three kindergartens in central and southern Okinawa; in Study 2, we conducted a questionnaire survey with 83 university students; and in Study 3, we conducted an individual interview with one elementary school teacher. The results showed that (a) Kindergarten teachers utilized animal husbandry experiences not only in formal settings but also in the daily form of childcare. (b) Interaction with animals not only increased children's interest in living things and nature but also served to promote emotional interactions among children. Raising animals in kindergarten is not something that must be implemented, due to safety concerns and consideration for the surrounding environment and ecosystem. However, it is an effective means of providing childcare. In addition, the topic of animals always appears in science, living environment studies, and ethics in elementary school. Therefore, it may be important for young children to have some experience with animals in their early childhood.

Keywords：animal husbandry experiences, kindergarten, child development, childcare

[*1] 琉球大学教育学部　Faculty of Education, University of the Ryukyus
[*2] なないろ乳児保育園　*Nanairo* Infant Nursery School

幼稚園で動物を飼育することの意義とは一体何だろうか。保育の場における動物[1]の飼育活動は、身近な自然と接する機会を急激に失いつつある子どもたちにとっては、自然生命体と触れ合う貴重な体験である（藤崎, 2001）。しかし、『幼稚園教育要領』や『小学校学習指導要領』においては、冒頭の問いに関する「記述」は散見するが[2]、冒頭の問いに直接的に「回答」しようと試みた実証的研究はほとんどない。

たとえば、藤崎は一連の研究（2001, 2002, 2004a, 2004b）を通して、幼児の生物学的理解の萌芽や幼児が動物に付与する心的属性の内実などを明らかにした。藤崎（2001）によれば、幼児期において、子どもたちは、生物学を体系的に学ぶことはないが、子どもたちは、虫取り遊びという小さな虫とのかかわりの中において、生物の多様性やその生死、さらには生物と環境との関係性という様々な側面における生物学的理解の萌芽を示す。また、藤崎（2004a）は、身近な虫の名前に関する幼児の理解を調査し、幼児期において、子どもたちは、身近な虫の名前に関する理解を急速に深めていくことを示した。

藤崎（2002）は、動物の種類によって、心的属性の付与の仕方が変化するかどうかを、年少児・年中児・年長児、大学生を対象に調査した。その結果、幼児は、同じ心的属性でも、その内容（氷に触ると冷たい、仲間に噛まれると怒る、意地悪は駄目だと思うなど）によっては、動物への付与を行わないが、その付与のパターンは、ウサギ、カメ、金魚という動物の種類によって違いはなかった。一方で、大学生では、多くの内容において、動物の種類による違いが認められた（たとえば、ウサギは、カメや金魚に比べて、かわいいと褒められると喜び、また、ウサギは、カメや金魚に比べて、新しいおもちゃをほしがる）。つまり、大人は、「動物の持つ心的属性（感情、欲求、信念）は、動物の種類によって異なる」と考えていたが、子どもたちはそうではないことが示唆された。

その後、藤崎（2004b）は、年少児・年中児・年長児を対象に、(a)幼児はウサギに対してどのようにかかわるのか、(b)幼児はウサギの心をどのように理解しているのかを調査した。その結果、(a)年少児は、ウサギを「見る」「追う」「餌を投げる」というかかわりが多く、年長児はウサギへの「掃除」「コミュニケーション活動」（声かけ、手招きなど）が多かった。そして、(b)動物の「心」に対する擬人的理解には、年少児に見られるような、ウサギについての生物学的知識が乏しいが故に、既知である人間の知識をウサギに当てはめて理解しようとする擬人化（過剰付与）と、年長児に見られるような、生物学的な知識と両立する形での感情移入的な「心」の理解の仕方がある、ということが示唆された。

しかし、保育の現場には、子ども、動物、そして保育者がいるにもかかわらず、藤崎の一連の研究においては、保育者の視点に関する分析がほとんど行われていなかった。そこで本研究の目的は、冒頭の問いに直接的に答えるべく、(a)保育者は、動物を飼育することを保育へどのように活用しているのか、(b)保育者の視点から見た、動物とのかかわりを通して見られる子どもの育ち、を明らかにすることであった。

これら２つの目的を明らかにするために、本研究では、研究１において、幼稚園の副園長や主任に個別インタビューを行った。本研究では、冒頭の問いに対してさらなる回答を行うべく、幼稚園での動物の飼育が、その後の発達段階にどのような影響を与えるのかを明らかにするために、研究２と研究３を実施した。具体的には、大学生は、今の自分にとって、保育所や幼稚園での動物の飼育経験はどの程度役に立っていると考えているのであろうか。この問いを明らかにするために、研究２では、大学生を対象として、質問紙調査を実施した。また、『小学校教育要領』にも記載されているように、動物とかかわることが小学校教育の内容と直接的な関連性を持つのであれば[3]、小学校教師は、幼稚園で動物を飼育することの意義をどのように捉えているのであろうか。この問いを明らかにするために、研究３では、小学校１年生の担任教師１名に対して個別面接を行った。

研究１

目　的　研究１の目的は、(a)沖縄県の公立幼稚園ではどのような動物が飼育されているのかという実態、(b)沖縄県の保育者は、動物を飼育すること

を保育へどのように活用しているのか、(c)動物とのかかわりを通して子どもたちにはどのような育ちが見られるのか、を明らかにすることであった。

方　法

調査対象者　調査対象者は、沖縄県北部の公立幼稚園４園、沖縄県中南部の公立幼稚園３園の副園長もしくは主任、計８名であった（保育職歴は10～38年、平均職歴は23.8年、全て女性）[4]。高濱（2001）では、保育職歴２～４年を初任者、５～10年を中堅、11年以上をベテランとみなしているため、本研究の調査対象者は、ほぼベテランであるといえる。

手続き　幼稚園とアポイントメントをとった後、インタビュー内容を園側に伝えた。協力が得られた場合には、著者２名で幼稚園を訪問し、副園長もしくは主任に対して個別インタビューを実施した。インタビュー内容の正確な記録を行うために、許可を得た上で、面接内容は、ICレコーダーに録音した。

主たるインタビュー項目　主たるインタビュー項目は下記の通りであった[5]。

1．幼稚園ではどんな動物を飼育されていますか？
2．動物を飼うことを保育へどのように活用していらっしゃいますか？
3．動物とかかわる中で、子どもたちにどのような育ちが見えてきますか？

調査期間　2012年８月に５園（Ａ園８月２日、Ｂ園８月８日、Ｃ園８月９日、Ｄ園８月９日、Ｅ園８月15日）、10月に２園（Ｆ園10月25日、Ｇ園10月30日）、第１著者と第２著者が園に行き、個別インタビューを行った。新たにウサギを飼育する予定であったＡ園には、2012年12月20日に、２回目の個別インタビューを行った。

結果と考察

調査対象園の特徴　Ａ園（沖縄県中部）は、調査を行った年度からウサギを飼育していこうと考え、実行した園である。Ｂ園（沖縄県北部）は、保育者が一人であるため、動物の飼育を積極的に行うことは難しい園である。Ｃ園（沖縄県北部）は、幼稚園の周辺が自然に囲まれているため、動物を飼育する必要性が必ずしもない園である。Ｄ園（園舎は、調査時点頃に建て替えが完了、沖縄県北部）は、飼育していたウサギが調査を行った年の４月に亡くなったが、今後ウサギを飼育していこうと考えている園である。Ｅ園（沖縄県南部）は、調査を実施した年度に新設された園である。Ｆ園（沖縄県中部）は、以前から多くの動物を飼育している幼稚園である。Ｇ園（沖縄県北部）は、Ｃ園に紹介をして頂いた園であり、Ｃ園と同じく、幼稚園の周辺が自然に囲まれているため、動物を飼育する必要性が必ずしもない園である。

沖縄県の公立幼稚園で飼育されている動物　魚類は全ての園で飼育されていた（Table１）。哺乳類、節足動物、両生類は全体の28.57％で、爬虫類は全体の14.29％で飼育されていた。飼育されていた動物の種類（哺乳類などの「類」）の多様性は１～４種類、「目」の多様性は１～７種類であった。

詳細は付録に記しているが、沖縄県中南部の幼稚園（Ａ園、Ｆ園）では、ザリガニが飼育されていたが、北部の幼稚園（Ｇ園）では、農業に悪影響を及ぼす可能性があるとして、飼育されていなかった（Table１、付録Table J）。鳥インフルエンザが流行って以降、鳥類は飼育できなくなったそうである（付録 TableＥ、TableⅠ）。沖縄県中部にあるＡ園では、ウサギを屋外で飼育することで、ハブが出る可能性を心配していたが（付録TableＡ）、沖縄県北部のＢ園やＣ園では、日常的にハブが出るので、ハブが出るかどうかということは心配してはいない（付録TableD、Ｅ）そうである。このように、沖縄県北部と中南部とでは、飼育可能動物やハブに対する意識などの点で地域差があるようであった。

動物を飼育することの保育への活用　動物を飼育することは、絵本、歌唱、お絵かき、リトミックという形で設定保育（部分保育）に活用されていた。昆虫などは捕まえて「観察する」「図鑑などで調べる」という形で、日常的な保育へも活用されていた（Table２）。

動物とのかかわりを通して見られる子どもの育ち　動物とのかかわりは、子どもの生き物・自

Table１　沖縄県の公立幼稚園７園（北部４園、中南部３園）で飼育されていた動物

類	目	回　答	Ａ園	Ｂ園	Ｃ園	Ｄ園	Ｅ園	Ｆ園	Ｇ園	合計
哺乳類	ウサギ目	ウサギ	1	0	0	0	0	1	0	2
	ウシ目	ミニブタ	0	0	0	0	0	1	0	1
魚　類	カダヤシ目	グッピー	0	1	1	1	0	1	1	5
	コイ目	金魚	1	0	0	0	1	1	1	4
	スズキ目	ヨシノボリ、闘魚	0	0	1	0	0	0	1	2
	ナマズ目	プレコ	0	0	0	0	0	1	0	1
爬虫類	カメ目	カメ	1	0	0	0	0	0	0	1
節足動物	エビ目	ザリガニ	1	0	0	0	0	1	0	2
	バッタ目	コオロギ	0	0	0	0	0	0	1	1
両生類	カエル目	オタマジャクシ	0	0	0	0	0	0	1	1
	有尾目	ウーパールーパー	0	0	0	0	0	1	0	1
		合　計	4	1	2	1	1	7	5	21

注）闘魚は台湾金魚のことである。

然への興味関心（好奇心）を高めるだけでなく、子ども同士の情緒的交流を促進し、「思いやり」「自主性」「自信」「感動」という子どもの情緒的発達を促していた（Table３）。具体的には、動物を飼育することで、動物には命があり、大切にしなければならないという動物に対する思いやりが、子どもたちには芽生えていた。動物を飼育することを通して、友達とかかわりがもてなかった子どもが心を開き、友達と接することができるようになっていた。つまり、自分－友達という二項関係ではなく、動物－自分－友達という形で三項関係が成立することで、子どもたち同士の情緒的交流は促進されていた。

幼稚園で動物を飼育するということは、安全面、周りの環境・生態系への配慮などから、絶対に実施しなければならない、というものではない。ただし、保育を行う際の一手段としては有効である。また、小学校の理科、生活、特別の教科　道徳では、動物の話題は必ず登場する。そのため、幼児期に何らかの形で、動物とのかかわりという原体験・実体験を積むことは重要なのかもしれない。

研究２

目　的　研究２の目的は、大学生は、保育所や幼稚園での動物の飼育体験を意義のあるものとして考えているかどうかを明らかにすることであった。

方　法

調査対象者　調査対象者は、沖縄県にあるＡ大学に通う大学生83名（男性39名、女性44名、平均年齢19.11歳、文系50名、理系33名、１年生61名、２年生15名、３年生４名、４年生３名）であった。

質問紙　質問紙は、以下の６種類の質問から構成されていた。

１．フェイスシート（学部、学年、年齢、性別）
２．あなたは、小さいときに、保育所や幼稚園に通ったことがありますか？当てはまるもの全てに○をつけて下さい（選択肢：保育所／幼稚園には通っていない、公立保育所［沖縄県、それ以外の県］、私立保育所［沖縄県、それ以外の県］、公立幼稚園［沖縄県、それ以外の県］、私立幼稚園［沖縄県、それ以外の県］）。
３．保育所や幼稚園に通ったことが「ある」方にお伺いします。保育所や幼稚園では、どんな動物を飼育していましたか（たとえば、ウサギ、小鳥、カメ、金魚）。下の空欄に、思い出せる

Table２　保育への活用

Ａ園	・絵本を見て、成長過程を知る（カママダラの絵本を読み聞かせで使用する）。 ・オタマジャクシからカエルまでを観察する。
Ｂ園	・部分保育には取り入れていない。日常的に取り組んでいる。 ・季節の動物（木登りトカゲ・セミなど）を子どもたちが捕まえてくると飼育している。 ・子どもたちが捕まえてきた動物が、何を食べるのか、図鑑や、小学校の図書館、インターネットを使って調べさせている。 ・グイカーやバッタ、チョウなどの食物連鎖を実体験させている。
Ｃ園	・図鑑を置き、捕まえた虫が何なのか調べることができるようにしている。 ・セミの歌を歌ったり、セミを折り紙で作ったりしている。
Ｅ園	・金魚の絵を掲示し、金魚の歌を歌っている。金魚の絵も描いている。
Ｆ園	・リトミックの動物のマネの時に、ブタの歩き方やウサギのたとえで活用している。
Ｇ園	・やんばるという自然の中で、園外保育を行っている。近くの海へ行き、ヤドカリと遊ぶ（天然記念物のため捕獲はしない）。カニを捕まえてきて、保育室で飼育している。川遊びの時にエビを捕まえて、保育室で飼育している。

注）Ｄ園は、インタビュー時に、動物をクラスで飼育している保育者が不在であったため、「不明である」という回答であった。

Table３　動物とのかかわりを通して見られる子どもの育ち

Ａ園	・いつもウサギを気にかけている（いるかな、元気かな、など）。 ・まだ来たばっかりなので、扱いが乱暴な子どもがいる。ジュウトリバサミを自分のところにウサギが来ないと言って、投げている。 ・餌を自宅から持って来る子どももいる。 ・幼稚園の仲間という意識があるように思う。
Ｂ園	・成長の過程はまだ微妙（まだ手探りなため）。 ・お互いを思いやる気持ちの育ちは見えてきた。
Ｃ園	・生き物に対して興味がでてきている。 ・乱暴な扱いをしている子に他の子が注意をするようになった。
Ｄ園	・チョウの成長過程にて、さなぎが羽化しているときに子どもたちが「頑張れ」と応援していた。 ・さなぎを触らないように子ども同士で注意し合ったり、さなぎを台風から守ろうとしたりと、子どもなりに考えている姿を見ることができた。 ・カメの甲羅に石鹸をつけて洗ってしまっていた。
Ｅ園	・動物が苦手な子が、ウサギの触れ合うコーナーで触ったり、抱っこしたりする中で、愛情表現ができるようになった。 ・動物の世話を進んでやるようになった。
Ｆ園	・好奇心が芽生える。 ・観察を通して、興味関心を育てていきたい。 ・オオゴマダラを調べてみることで、感動が次の小学校での学習意欲へと繋がる。
Ｇ園	・思いやりや優しさ、探究心、自主性が芽生え、自分に自信を持つことができる。 ・友達とのかかわりを持つことができる。 ・自然に興味関心を持つことができる。 ・友達を認めることができる。

注）Ａ園は、１回目ではなく、２回目（ウサギの飼育後）のインタビュー結果である。Ｅ園は、Ｅ園に関してではなく、インタビュイーが以前に勤務をしていた幼稚園に関する回答である。

だけ、記入して下さい。

4．保育所や幼稚園に通ったことが「ある」方にお伺いします。保育所や幼稚園で動物を飼育した経験は、今の自分にとって、どの程度役立っていると思いますか。5段階（1＝「全く役立っていない」から5＝「非常に役立っている」）で評定をして、当てはまる数字に○をつけて下さい。

5．あなたは、子どもたちのために保育所や幼稚園で動物を飼育した方がいいと思いますか。5段階（1＝「そう思わない」から5＝「そう思う」）で評定をして、当てはまる数字に○をつけて下さい。

6．あなたは、保育所や幼稚園で動物を飼育することには、どのような意義があると思いますか。箇条書きで、下の空欄に記入して下さい。どんな些細なことでも構いません。

調査実施日　調査は、2012年7月25日に、第一著者が担当していた一般教養の授業後に実施した。

結果と考察

保育所や幼稚園に通ったことがある調査対象者

保育所または幼稚園に通っていなかった調査対象者は0名であった。沖縄県の保育所や幼稚園に通っていた調査対象者は50名であった。沖縄県以外の保育所や幼稚園に通っていた調査対象者は18名であった。なお、保育所や幼稚園の所在地が沖縄県なのか沖縄県以外なのかが不明な者（無回答者）は15名であった。

保育所や幼稚園で飼育されていた動物　回答は第1回答から第6回答まであった。以下では、中尾・加藤（2005）に基づき、第1回答と、全回答（第1回答から第6回答までの間に少なくとも一つ該当するカテゴリーの回答があったかどうか）に分けて分析を行う。著者らは、第1回答は、最も意識に上りやすい反応であり、全回答は回答の多様性あるいはレパートリーを反映した反応であるという想定をしている。

第1著者がKJ法（川喜田，1967）を用いて内容分析を行った結果、全回答者においては、第1回答では「ウサギ（40）」「金魚（6）」「カメ（5）」の順で回答数が多く、全回答では「ウサギ(51)」「金魚（27）」「ニワトリ（27）」「カメ（23）」の順で回答数が多かった（Table4）。また、沖縄県の保育所や幼稚園では、第1回答では「ウサギ（27）」「カメ（5）」「金魚（4）」の順で、全回答では「ウサギ(36)」「ニワトリ(23)」「金魚(19)」「カメ(19)」の順で回答数が多かった。他県の保育所や幼稚園では、第1回答では「ウサギ（6）」のみで3以上の回答数が得られて、全回答では「ウサギ（6）」「金魚（2）」「コイ（2）」の順で回答数が多かった。したがって、大学生が幼児だった頃、保育所や幼稚園で飼育されていた動物は、概ね、「ウサギ」「金魚」「ニワトリ」「カメ」であり、「ウサギ」が最も意識に上りやすい回答であることが示唆された。

保育所や幼稚園での飼育経験は、大学生の自分にとって役立っているかどうか　平均値は2.68（SD＝1.22）であった。評定は5段階で求めたため、真ん中の値は3である。したがって、大学生は、今の自分たちにとって、保育所や幼稚園での飼育経験は、やや役に立っていないと思っていることが示唆された。なお、所属学部（文系、理系）、性別（男性、女性）、通っていた保育所や幼稚園の場所（沖縄県、他県）によって、得点に違いがあるかどうかを、t検定を用いて検討したが、有意差は得られなかった（それぞれ、t (75) ＝1.10, n.s.; t (75) ＝0.07, n.s.; t (63) ＝1.13, n.s.）。

子どもたちのために保育所や幼稚園で動物を飼育した方が良いかどうか　平均値は4.17（SD＝0.96）であった。評定は5段階で求めたため、真ん中の値は3である。したがって、大学生は、保育所や幼稚園で子どもたちのために、動物を飼育した方が良いと思っていることが示唆された。なお、所属学部（文系、理系）、性別（男性、女性）、通っていた保育所や幼稚園の場所（沖縄県、他県）によって、得点に違いがあるかどうかを、t検定を用いて検討したが、有意差は得られなかった（それぞれ、t (79) ＝1.06, n.s.；t (79) ＝0.09, n.s.；t (66) ＝1.57, n.s.）。

大学生が考える保育所や幼稚園で動物を飼育することの意義　第1著者がKJ法（川喜田，1967）を用いて内容分析を行った（Table5）。その結果、大学生は保育所や幼稚園で動物を飼育する意義を主に「命の大切さを知り死生観を育む」「向社会性を育む（思いやり、優しさ、養護性など）」「動

Table４　大学生が幼稚園・保育所に通っていた頃にそこで飼育されていた動物

類	目	回　答	全　体		沖縄県		他　県	
			第１回答	全回答	第１回答	全回答	第１回答	全回答
哺乳類	ウサギ目	ウサギ	40	51	27	36	6	6
	牛目	ヤギ	1	1	1	1	0	0
	ネズミ目	ハムスター	0	1	0	1	0	0
鳥　類	キジ目	ニワトリ	3	27	3	23	0	0
		ヒヨコ	1	1	1	1	0	0
		七面鳥	1	1	1	1	0	0
		烏骨鶏	0	1	0	1	0	0
	カモ目	アヒル	1	9	1	6	0	1
	その他	小鳥	1	3	0	2	0	0
		鳥	2	5	2	3	0	1
魚　類	コイ目	金魚	6	27	4	19	0	2
		コイ	1	2	0	0	1	2
	カダヤシ目	グッピー	1	6	1	4	0	0
	ダツ目	メダカ	1	3	0	1	1	1
	ウナギ目	ウナギもしくはドジョウ	1	1	0	0	1	1
	その他	熱帯魚	0	1	0	1	0	0
		魚	0	5	0	4	0	1
爬虫類	カメ目	カメ	5	23	5	19	0	0
節足動物	エビ目	ザリガニ	0	4	0	4	0	0
	チョウ目	チョウ	2	2	2	2	0	0
		オオゴマダラ	1	1	1	1	0	0
		カイコ	1	2	0	1	1	1
	甲虫目	カブトムシ	1	1	1	1	0	0
		クワガタムシ	0	1	0	1	0	0
両生類	カエル目	カエル	0	2	0	1	0	1

注）表中の数字は回答数（頻度）である。第１回答は最初の回答、全回答は第１回答から第６回答までの間に少なくとも一つ該当する回答があったかどうか、である。全体の回答には、沖縄県か他県かが不明な回答が含まれるため、沖縄県の回答数と他県の回答数を足しても、全体の回答数にはならない。

物についての知識増加（動物そのものについて、動物への接し方、共生など）」「動物へ慣れ親しむきっかけ作り」だと考えていること、第１反応では回答数が少ないが全反応では回答数が増加する反応（つまり、意識に上りやすいわけではないが、そう言えば、という感じで回答のレパートリーには含まれる反応）は「動物とのふれあいは楽しい・癒される」「責任感・役割分担を学ぶ」「生き物を育てる大変さを知る」であることが示唆された。

以上の結果から、(a)大学生が保育所や幼稚園に通っていた頃、そこで飼育されていた動物は、概ね、「ウサギ」「金魚」「ニワトリ」「カメ」であり、「ウサギ」が最も意識に上りやすい回答であること、(b)大学生は、今の自分たちにとって、保育所や幼稚園での飼育経験は、やや役に立っていないところはあるかもしれないが、保育所や幼稚園では動物を飼育した方がいいと思っていること、(c)大学生は、保育所や幼稚園で動物を飼育する意義を、主に「命の大切さを知り死生観を育む」「向社会性を育む」「動物についての知識増加」「動物

Table５　大学生が考える保育園や幼稚園で動物を飼育することの意義

カテゴリー	第１回答	全回答	回答例（各カテゴリー３つずつ例示）
１．命の大切さを知り死生観を育む	23	30	命の大切さを知る。生と死を具体的に知ることができる。動物にも命があって、大切にしなければならないことを学べる。
２．向社会性を育む（思いやり、優しさ、養護性など）	24	38	思いやりの心を育てるのに役立つと思う。優しい人になると思う。動物に対する愛情がわく。
３．動物についての知識増加（動物そのものについて、動物への接し方、共生など）	10	14	飼育することで生き物を知る。生き物の扱いを知る。自分以外、人間以外の生き物もいることが分かる。
４．動物へ慣れ親しむきっかけ作り	9	13	動物と触れ合う楽しさを早いうちから味わえる。動物と触れ合うことができる。動物に慣れ親しむことができる。
５．動物とのふれあいは楽しい・癒される	3	7	世話をしていて楽しい。動物を見ていると、楽しいような気分になるから良いと思う。癒し。
６．動物への興味関心向上	2	5	動物に対して興味をもち、動物を好きになることができる。動物に興味を持つ。動物好きになると思う。
７．否定的意見	2	3	結局、委員や係への負担が大きい。幼稚園生に動物の飼育は早すぎる気がする。保育園児や幼稚園児はまだ世話をしたりすることができないので、動物との触れ合いが少なく、効果は低いようにも感じる。
８．責任感・役割分担を学ぶ	1	9	みんなで掃除したり、甲羅を洗う当番を決めたり、協力して何かをすることを学んだ。責任感を養う。飼育係にわりふることで仕事をちゃんとやる責任感を学ばせる。
９．動物を育てる大変さを知る。	0	5	生き物を育てることの難しさについて学ぶことができる。世話の大変さを知る。世話をさせて、生き物を育てる大変さを理解させる。
10．心について学ぶ	0	2	心を学ぶ。動物の動作などを見て、何を考えているのか考えること。
11．その他１：発達に好影響	2	6	人間性を養う。生き物に触れることで、子どもの情緒の発達に良い影響を与えるのではないか。掃除も行うので習慣が身に付く。
12．その他２	4	6	子どもにとっては良い遊び相手になると思うし、友達がいない子も動物になら接しやすいのかもしれない。暇つぶし。分からない。
合　計	80	138	

へ慣れ親しむきっかけ作り」だと考えており、意識に上りやすいわけではないが、そう言えば、という感じでは、「動物とのふれあいは楽しい・癒される」「責任感・役割分担を学ぶ」「生き物を育てる大変さを知る」などと回答する傾向があることが示唆された。

研究３

目　的　研究３の目的は、小学校１年生担任教師１名への個別インタビューを通して、幼稚園で動物を飼育することは、小学校の教育を進めていく上で、どのような意義を持つのかを明らかにすることであった。

方　法

調査対象者　調査対象者は、沖縄県北部の公立Ｘ小学校１年生の担任であるＹ先生(教職歴25年、専門は理科教育）であった。

調査日　調査日は2012年７月23日であった。

インタビュー項目　個別インタビューの質問項目は、以下の３項目であった。

1．理科教育を進める上で、幼稚園の時に動物を飼育することは重要ですか？
2．公立幼稚園で動物を飼育する園が減ってきているという話を聞くのですが、このことについてどう思いますか？
3．動物を飼育することができない場合、理科教育上、他に行った方が良いことはありますか？

結果と考察

Table６より、動物を飼育することは、一つひとつの要素に還元して代替できるもの(たとえば、植物を育てる）とそうでないもの（動物の温もり）があり、幼児期に実体験として、何が必要なのかを､改めて考える必要があることが示唆された(たとえば、命の温もり、自分より弱い生き物、触りすぎると弱ってしまう、自分の思い通りにはならない)。

総合考察

研究１から３の結果を踏まえると、『幼稚園教育要領』や『小学校教育要領』にあるように、子どもたちは、幼稚園において動物を飼育することで、「動植物に対して、観察をし理解を深めると共に、親しむ、優しい心で接する、大切にする、愛護する、心を動かされる、生命の尊さに気づく」といったことを体験していた。子どもたちは、動

Table６　Ｙ先生への個別インタビュー結果

１．理科教育を進める上で、幼稚園の時に動物を飼育することは重要ですか？ ・重要である。 ・命の大切さを実感させていく上で、道徳的な生命尊重の概念が関係してくる。また、小学校の教育課程の全ての領域で関係してくる。 ・理科とは限らずに必要になってくる。 ・１・２年生の生活科で動物を抱っこさせる分野がある。 ・小学校は鳥インフルエンザが流行って以来飼っていない。 ・幼稚園で実体験がないと、５・６年生の生命の誕生、心臓の働きの分野を学ぶ時に、実感が教科書上になってしまう。 ・昔飼ったことがある、または、ペットを飼っている家庭が少ない。 ・共通した実体験を子どもたちが持っていないと、「みんなが分かる」にはなかなかならない。 ・幼稚園が飼える環境なら飼っていてほしい。
２．公立幼稚園で動物を飼育する園が減ってきているという話を聞くのですが､このことについてどう思いますか？ ・小学校の方が如実にかかわっているので、動物を飼育すること自体は必要だと思う。 ・生命尊重の視点で、ウサギはどんどん生んで死んでいき、飼育委員が一時期赤ちゃん死体の片付けになっていた。また、生まれたウサギの貰い手を探さないといけない。 ・小学校より幼稚園の方が手厚く、ウサギを１匹で飼育したり、季節に見られる動物を飼育したりしているのを実感する。 ・現在､園舎改築のとき､飼育小屋は設備として完備されていない（幼稚園の法規に飼育小屋は入っていない)。 ・土日の世話や餌代の問題を解決していかないと飼育していくのは難しいと感じる。 ・カメは良いけれど、ウサギはダメと、飼育する動物の選択が入ってきている。
３．動物を飼育することができない場合、理科教育上、他に行った方が良いことはありますか？ ・生き物に慣れていく必要がある（個人的にはウサギが良いと感じる)。 ・生き物として動物に対応している植物を育てていく。 ・飼育していく中で、動物で認めてきた生き物という視点を重点化し、補強していくことが重要ではないかと考えている。

物に触れたり、観察したりと五感を使って動物とかかわり、命の大切さや温もり、生き物についての知識などを原体験・実体験として学ぶことができていた。このように、「五感を使って、命の大切さや温もり、生き物についての知識などを原体験・実体験として学ぶこと」は、動物を飼育することの意義であり、そこには個々の要素に還元できない全体としてワンセットで重要な要素があるのではないだろうか。この原体験・実体験を幼児期に経験することで、その後の小学校教育の内容を、体験を伴ったものとして実感できることが、本研究で示唆された幼稚園で動物を飼育することの意義だと考えられる。

本研究で調査を行った幼稚園全園では、魚類が飼育されていた。だが、研究２の調査対象者の大学生が、保育所または幼稚園に通っていた頃には、そこではウサギが多く飼育されていた。つまり、時代の変化とともに飼育されている動物はウサギから、魚類へと変化していた。

動物を幼稚園で飼育することについては課題（問題点）もある。それは、保育者が多忙であるということである（付録TableG）。保育以外の時間を使って動物を飼育することは難しいのが現状である。ウサギのような動物を飼育すると休日や長期休暇の時の餌やりは、保育者が幼稚園に来てやらなければならない。餌代をどうするのかという経理の問題もある（付録TableC）。さらに、ザリガニの例でも明らかなように、周りの生態系への影響についても考慮しなければならない（付録TableＪ）。獣医師との連携も必要となる（付録TableB、TableC）。

私たちは本研究を実施して、『幼稚園教育要領』には、動物を飼育することは重要であるという可能性が示唆されているが、必ずしも飼育しなければならないということはないように感じた。幼稚園の周辺に自然があるのなら飼育しなくても動物と触れ合うことができる。また、動物を飼育していなくても沖縄県の公立幼稚園ならではの取り組みとして、隣接する小学校で飼育されている動物と触れ合うこともできる。ウサギのような哺乳類を飼育することで保育者の負担がかかるのならば、日常的に触れ合える動物とのかかわりを通して、命の尊さなどを伝えていくことは十分に可能であると考えられる。研究３のインタビュイーであるＹ先生の回答にあるように、動物の飼育が難しい場合には、何ができて何ができないのか、代替措置として何が可能なのかを、今後も継続的に試行錯誤しながら問い直す必要がろう。その際には、本研究が提案をしたような、ゲシュタルト的に「全体」として見出される特徴、そして、「個々の要素」に還元可能な特徴という２つの視点が重要になるであろう。また、動物とのかかわりを、１つの幼稚園という単位だけで考えるのではなく、地域全体の問題として考えるという視点も重要である（付録TableD）。

本研究では、公立幼稚園のみを調査の対象とした。したがって、今後の課題としては、私立幼稚園や保育所を対象とする調査を行う必要があるだろう。なぜなら、沖縄県北部の公立幼稚園では、近隣の公立幼稚園では動物を飼育していないが、保育所や学童保育では動物を飼育しているという話を聞いたからである（付録TableD）。これらの場所において、なぜ、公立幼稚園で動物の飼育が行いにくくなっている近年において、飼育を続けることができているのか、そこに積極的な理由や消極的な理由があるのか、本研究の結果と比較してみたいと思う。

付　記

本研究は、第１著者指導のもと、第２著者の勝連（川原）綾さんが2013年３月に琉球大学教育学部生涯教育課程子ども地域教育コースへ提出した卒業論文（川原，2013）で得られたデータに対して、再分析を行い、新たに論を展開したものです。本研究の一部は、日本保育学会第66回大会（中村学園大学）で発表を行いました。調査にご協力下さいましたＡ園、Ｂ園、Ｃ園、Ｄ園、Ｅ園、Ｆ園、Ｇ園の園長先生・副園長先生・主任の先生をはじめとする諸先生方、また、小学校教諭のＹ先生へこの場を借りて謝意を表します。

引用文献

浅井 晴夫（2002）．原色ワイド図鑑－昆虫Ⅰ－　学習研究社

藤崎 亜由子（2001）．幼稚園児の虫取りあそびにおける諸活動の分類　日本保育学会第55回大会発表論文集，768－769.

藤崎 亜由子（2002）．幼稚園児は動物の「心」をどう理解するか－ウサギ・カメ・キン ギョとの比較から－　日本教育心理学会第44回総会発表論文集，384.

藤崎 亜由子（2004a）．身近な虫の名前に関する幼児の理解　日本保育学会第57回大会発表論文集，828－829.

藤崎 亜由子（2004b）．幼児におけるウサギの飼育経験とその心的機能の理解　発達心理学研究，*15*，40－51.

川原 綾（2013）．乳幼児期に動物を飼育することによる子どもの心の発達と保育　琉球大学教育学部卒業論文（未公刊）

川喜田 二郎（1967）．発想法－創造性開発のために― 中央公論社

松下 清（2002）．原色ワイド図鑑－鳥－　学習研究社

文部科学省（2017a）．幼稚園教育要領　文部科学省

文部科学省（2017b）．小学校学習指導要領（平成29年告示）　文部科学省

中尾 達馬・加藤 和生（2005）．成人における愛着スタイルと愛着行動の状況間一貫性　九州大学心理学研究，*6*，9－20.

佐藤 幹生（2009）．ジュニア学研の図鑑－水の生きもの－　学研教育出版

高濱 裕子（2001）．保育者としての成長プロセス－幼児との関係を視点とした長期的・短期的発達－　風間書房

山口 竜也（2008a）．ポプラディア情報館－動物のふしぎ－　ポプラ社

山口 竜也（2008b）．ポプラディア情報館－魚・水の生物のふしぎ－　ポプラ社

注

[1] 動物とは、系統樹における節足動物と脊椎動物を意味する（佐藤、2009）。節足動物には、昆虫やザリガニが含まれる。脊椎動物には、哺乳類、魚類、鳥類、両生類、爬虫類が含まれる。動物は、体の特徴などからグループ（目）に分けられる。これらのグループは、浅井（2002）、松下（2002）、山口（2008a，2008b）に基づき分類を行う。

[2] 『幼稚園教育要領』（文部科学省，2017a）では「人間関係」「環境」において、『小学校学習指導要領（平成29年告示）』（文部科学省，2017b）では「特別の教科　道徳」の「D．主として生命や自然、崇高なものとのかかわりに関すること」において、動植物とのかかわりは、「動植物に対して、親しむ、優しい心で接する、大切にする、愛護する、心を動かされる、生命の尊さに気づく」といった形で言及されている。

[3] 『小学校学習指導要領（平成29年告示）』（文部科学省，2017b）の「理科」では動物を「育てる」、「生活科」では、動物を「飼う」という形で、時折、動物の飼育に関する表現が直接的に登場する。

[4] A園、C園では、調査時に初任・中堅の保育者も同席していた（詳細は付録）。

[5] 全インタビュー項目（15項目）およびそれらに対するA～G園の回答の詳細については，付録Table A～Jに示した。

付　録

TableA　A園インタビュー結果（1回目）

1．幼稚園ではどんな動物を飼育されていますか？
・金魚、カメ（シマガメ・ミドリガメ）、ザリガニ
2．どこで飼育されていますか？
・金魚：玄関、カメ：オアシス（と呼ばれている中庭）、ザリガニ：各保育室
3．飼育はどうなさっています？
・ザリガニは当番制。玄関の水槽は、やりたいと言った子どもが餌をあげる。
4．動物を飼育していて、良かったことや悪かったこと（苦労されていること、困ったこと）は何ですか？
・良かったこと：命の尊さを教えることができた。脱皮、死んでいく過程を観察することができた。餌やりの責任を教えることができた。
・悪かったこと：餌の入れ過ぎで水が濁ってしまった。
5．子どもと動物のふれあいの様子（かかわり）について教えて下さい。
・登園しながら見て、保育室に入る。中には、止まって観察してから保育室に入ってくる園児もいる。子どもたちは、よく観察している（死んでいる、いなくなったけどどうしたのなどと保育士に言ってくる）。
6．動物を飼うことを保育へどのように活用していらっしゃいますか？
・絵本を見て、成長過程を知る（カママダラの絵本を読み聞かせで使用する）。オタマジャクシからカエルまでを観察する。
9．動物を飼うことができなくなった、ということで他にやってらっしゃることは、ありますか？
・沖縄こどもの国に年に1回遠足へ行っている。ウサギを飼う前に、小学校から借りてきて、芝生で遊ばせてみることを予定している。近くにヤギ、アヒル、ニワトリを飼育している人がおり、そこに見に行っている。小学校にウサギを見に行っている。
10．公立幼稚園で、動物を飼育する園が減っているという話を聞くのですが、どう思いますか？
・ウサギは増えすぎて大変という話を他の園で聞いた。ウサギが穴を掘って、隣の畑まで被害が及んだということも聞いた。
13．園児数：74名
14．インタビュイーの保育職 職歴：A保育者38年、B保育者30年、C保育者3年、D保育者2年

15．追加質問・その他
【追加質問1】これから、ウサギを園で飼うそうですが、ウサギを飼うことに対する期待や不安について教えて下さい。
・期待：ぬくもりを与えてあげたい。ウサギの死も教育として扱いたい。
・不安：ハブが出る。子どもにアレルギーがでないか心配。
【追加質問2】ウサギを飼うにあたってやっていることはありますか？
・沖縄こどもの国で飼育の仕方を聞いている。インターネットで飼育小屋の写真を見つけ印刷し、大工さんにその写真を見せながら、見積もり中である。
【追加質問3】この地域で、動物を飼育しているなどと聞いたことはありますか？
・近くの小学校はウサギを飼育している。だが、飼育小屋の中にハブやネズミが出て不衛生だとも聞いた。

注）表中に登場しないインタビュー項目は、インタビューを行っていない（項目7、8、11、12）。

Table B　A園インタビュー結果（2回目）

3．ウサギの飼育はどうなさっています？
・クラスで週交代している（餌やりと掃除）。先生が主となって、朝来た子（4・5名）と掃除をしている。午後子どもたちの降園後、先生が掃除をしている。

4．ウサギを飼育していて、良かったことや悪かったこと（苦労されていること、困ったこと）は何ですか？
・良かったこと：直にぬくもりのある動物に触れることができる。子どもたちが関心を持って掃除をしている。朝ウサギを見て保育室に入ってくる。
・悪かったこと：飼育してまだ1ヶ月のため、戸惑いはない。餌やりの加減が分からない。目に見えるところに餌を置いていたら、子どもたちが全部あげてしまう。

5．子どもと動物のふれあいの様子（かかわり）について教えて下さい。
・餌やりをしている。触ったり、撫でたりしている。Aくんは毎日餌やりをしながら、ウサギを触っている。自分の餌を食べてくれたことが嬉しいらしく、ニヤニヤしている。Aくんは、ウサギが何かをする度に先生に報告してくる。

6．ウサギを飼うことを保育へどのように活用していらっしゃいますか？
・まだやっていない。今後サークルを作ってもらい、ウサギの運動不足軽減と、直に子どもたちが触れ合えるようにしていきたい。

11．ウサギとかかわる中で、子どもたちにどのような育ちが見えてきますか？
・いつもウサギを気にかけている（いるかな、元気かな、など）。まだ来たばっかりなので、扱いが乱暴な子どもがいる。ジュウトリバサミを自分のところにウサギが来ないと言って、投げている。餌を自宅から持って来る子どももいる。幼稚園の仲間という意識があるように思う。

15．追加質問・その他
【追加質問1】いつウサギは幼稚園にきたのですか？
・約1ヶ月前に小学校の方から、メスの親子2匹をもらってきた。その時には、贈呈式もした。
【追加質問2】怖がる子どもはいないのですか？
・幼稚園につれて来る前に、小学校のウサギと触れ合いをした。その時に、ウサギのすばしっこさに驚いた。
【その他】
・小学校の先生や飼育委員と相談しながら飼育している。ウサギが来て、1週間は小学校から2人ずつ見にきてくれた。小学校と連携している。
・熊本の幼稚園では、朝サークルで子どもたちとウサギが遊び、昼には飼育小屋に戻し、カーテンをかけ、ウサギを休ませていた。
・獣医師に予防接種のことを聞いた。また、ウサギに爪でひっかかれたらどうしたらいいかも相談した（そのようなことで訴えられたことはないと聞き、安心して飼育している）。
・想像していたものとは違う。
・クッションやタオルをひいて寒くないようにしてあげたが、ウサギがぐしゃぐしゃにしてしまった。

注）表中に登場しないインタビュー項目は、インタビューを行っていない（項目1、2、7－10、12－14）。

Table C　B園インタビュー結果（追加質問を除く）

1．幼稚園ではどんな動物を飼育されていますか？
・グッピー（10匹前後）、前任の公立幼稚園（閉校）からの引き継ぎ（２・３年前から）
2．どこで飼育されていますか？
・保育室
3．飼育はどうなさっています？
・飼育当番はなく、やりたい子が餌やりをしている。水槽の掃除は子どもたちがやっている。
4．動物を飼育していて、良かったことや悪かったこと（苦労されていること、困ったこと）は何ですか？
・良かったこと：子どもたちが興味を持って、小さいものを大事にするようにできるようになったこと。これだけの力を入れてしまうとちぎれてしまう、だから友達に同じようにすると痛いよね、だからやめよう、と友達を思いやる気持ちを、動物を通して学ばせることができた。死んだら帰ってこない、だから殺さないでおこうという気持ちが子どもたちに芽生えた。
・悪かったこと：気温で水温が上がり、死んだものをみせてしまうこと。動物が死んだ時に、子どもが「生き返るんじゃん」と言っていたのにショックを受けた。
5．子どもと動物のふれあいの様子（かかわり）について教えて下さい。
・窓に当たって、アカショウビンとカラスが倒れてしまった。その時は、心臓マッサージして放してあげた（野鳥は絶対に触らせない、ゴム手袋は常に完備している）。
6．動物を飼うことを保育へどのように活用していらっしゃいますか？
・部分保育には取り入れていない。日常的に取り組んでいる。季節の動物（木登りトカゲ・セミなど）を子どもたちが捕まえてくると飼育している。子どもたちが捕まえてきた動物が、何を食べるのか、図鑑や、小学校の図書館、インターネットを使って調べさせている。グイカーやバッタ、チョウなどの食物連鎖を実体験させている。
8．動物を飼うことができなくなった、ということで他にやってらっしゃることは、ありますか？
・地域によって日頃見られるものを飼育していた。水槽関係を飼育していた。６年前まではアヒルがいた（死ぬまで見届けた）。
9．動物を飼えなくなったことで、不便に感じること、困っていること、不都合なことはありますか？
・ぬくもりを感じることができないため、簡単に殺してしまう。
10．公立幼稚園で、動物を飼育する園が減っているという話を聞くのですが、どう思いますか？
・しかたがない。子どもに何かあったときのことを考えると飼えない。自宅なら自己負担だが、幼稚園では費用面で厳しい。獣医師が定期的に来てくれるなら良いが、もし何かあって処分となると、子どもたちから取り上げてしまうことになる。何かあったら保健所も入ってくる。
11．動物とかかわる中で、子どもたちにどのような育ちが見えてきますか？
・成長の過程はまだ微妙（まだ手探りなため）。お互いを思いやる気持ちの育ちは見えてきた。
12．これから、他の動物を飼う予定はありますか？
・今のところはない。
13．園児数：25名
14．インタビュイーの保育職 職歴：12年

注）表中に登場しないインタビュー項目は、インタビューを行っていない（項目７）

TableD　Ｂ園インタビュー結果（追加質問）

15. 追加質問・その他

【追加質問１】この地域で、動物を飼育しているなどと聞いたことはありますか？

・前任の公立幼稚園（閉校）では、オカヤドカリを飼育し、教員の自宅で飼育しているウサギとイヌを獣医師に月１で見てもらって、週１で先生の家に子ども（２・３人）を招待していた。前任の園の隣にある小学校の生活科と合同で一昨年はやっていた。村内のＨ幼稚園は、飼育していない。村内のＩ幼稚園は、カメを飼育している。Ｊ幼稚園（閉校）では、ウサギとニワトリを地域の希望で飼育していた。Ｉ小学校では、ウサギは飼育していない。カエルは、つぼカビ病を持っていて、両生類に広がってしまうため飼育していない。Ｋ学童保育では、ヤギ、アヒル、イヌを飼育している。村内の学童保育はほとんど飼育している。飼いたいならどうしたらいいか村共通で考えている。

【追加質問２】動物を飼育していて、失敗例などはありますか？

・水槽を洗ってと指示したが、金魚まで石鹸で洗っていた（金魚は赤色が落ち、１ヶ月後に赤は戻った）。グッピーを指で潰していた。

【追加質問３】ハブについてはどんな対策をしていますか？

・ハブに気をつけるように指導はするが、制限はしない。アオダイショウ、ヒメハブ、タイワンハブ(毒強い)などの写真は常に子どもたちに見せている。ハブ捕り機の写真も見せている。動物に関しての情報源は全て自宅である。

【追加質問４】動物と子どもたちがかかわる中で、先生自身が気をつけていることはありますか？

・死んでいる魚は、子どもたちに気づかせている。先生は極力手を出さない。また、何で死んだのか考えさせている。池にグッピーがいるため、自宅で繁殖させ、常に幼稚園に魚がいるようにしている。子どもたちは何に興味をもっているのか、また与えるのではなく興味をもったものに対して答えていくようにしている。

【追加質問５】動物を飼育することについてどう思いますか？

・ウサギなど、温もりを感じるような動物を飼育できていないことは、子どもたちにはマイナスだが、良い機会だったと考えている。ウサギは買ってこないといけないが、幼稚園で捕れる虫は、身近な生態を知るのにはもってこいの教材だと考える。なぜなら、何を食べて生きているのか大人も分からないことを、子どもたちは知ることができるからだ。苦労しないと捕獲することができないことを分からせることもできる。

【追加質問６】死んだ動物はどうしていますか？

・お墓は花が咲いている場所であったり、桜の木の下だったりと、子どもたちの気まぐれで決めている。子どもたちは、桜の木の下は絶対に踏まないようにしている。

Table E　C園インタビュー結果

1．幼稚園ではどんな動物を飼育されていますか？：ヨシノボリ、グッピー
2．どこで飼育されていますか？：玄関先のミニ池（6・7年前から）
3．飼育はどうなさっています？
・決まった飼育当番はなく、水が減ったときには、気がついた先生や子どもが水を加えている。餌やりは与えすぎてしまうため、先生と一緒にあげている。
4．動物を飼育していて、良かったことや悪かったこと（苦労されていること、困ったこと）は何ですか？
・良かったこと：動物に興味関心を持って、変化に気づくことができた。動物は思い通りには動かないということを学べた。
・悪かったこと：おもちゃのように扱ってしまう。一生懸命とった動物に対して、死んだら「次また捕まえれば良い」という考えを持っている。小さな者にも命があることを伝えることが年間を通して課題となっている。
5．子どもと動物のふれあいの様子（かかわり）について教えて下さい。
・隣接する小学校で飼育しているウサギとニワトリを観察しに行っている。季節に見られるセミ、チョウを観察している。たわぶく（あぜみち）探検を行い、グッピー、スッポン、手長エビ、カニ、ヨシノボリを捕まえたりしている。教員の姑の家で飼育しているヤギを散歩がてら見に行っている。クワガタ、バッタ、トンボ、蝶、オオゴマダラを捕獲したら飼育している。オオグロヒョウモンはさなぎから飼育している。また、カエルやセミも幼虫から飼育している。今年はじめて園外に出てセミ捕りをした。
6．動物を飼うことを保育へどのように活用していらっしゃいますか？
・図鑑を置き、捕まえた虫が何なのか調べることができるようにしている。セミの歌を歌ったり、セミを折り紙で作ったりしている。
7．以前は、幼稚園で、どんな動物を飼育されていましたか？
・サークルにウサギやカモを入れて、触れ合いをさせていた。闘魚（台湾金魚、2・3年前）、カメ。
8．動物を飼えなくなったことで、不便に感じること、困っていること、不都合なことはありますか？
・生きた教育ができなくなっている。
9．動物を飼うことができなくなった、ということで他にやってらっしゃることは、ありますか？
・自然体験を例年以上に増やしている。年に一回親子で川遊びを行っている。去年は乗馬体験を行った。ミニ動物園をしている保護者がいたため一度行った。イノシシを飼っている保護者がいるため、秋頃に見に行く。
10．公立幼稚園で、動物を飼育する園が減っているという話を聞くのですが、どう思いますか？
・残念だと感じ、また寂しいとも感じる。
11．動物とかかわる中で、子どもたちにどのような育ちが見えてきますか？
・生き物に対して興味がでてきている。乱暴な扱いをしている子に他の子が注意をするようになった。
12．これから、他の動物を飼う予定はありますか？：ない
13．園児数：12名、14．インタビュイーの保育職 職歴：A保育者30年目、B保育者6年目

15．追加質問・その他
【追加質問1】動物との触れ合いなどはやっていますか？
・鳥インフルエンザ以来やっていない。小学校のウサギ小屋にも今は入らせていない。
【追加質問2】以前ウサギを飼育していた時のエピソードはありますか？
・ウサギと触れ合っていた時に、「暖かいね」「ドキドキしている」という言葉が子どもたちから出ていた。聴診器でウサギの心臓の音を聞かせていた。小学校のウサギを観察した後に、子どもが、ウサギの絵を描いていると、目は横についていたり、真正面からのウサギの顔には耳を描かなかったり、とよく観察しているなと思った。
【追加質問3】動物との触れ合いで気になっていることはありますか？
・保護者も自然との触れ合いが減ってきている。地域の自然に目を向けさせるためには、幼稚園側から働きかけないといけない。川の汚染が気になる。
【その他】　・ハブ対策に関して：日常的に出るので気にしていない。

Table F　D園インタビュー結果

1．幼稚園ではどんな動物を飼育されていますか？
・グッピー
2．どこで飼育されていますか？
・保育室
3．飼育はどうなさっています？
・飼育当番はなく、餌をあげるだけである。
4．動物を飼育していて、良かったことや悪かったこと（苦労されていること、困ったこと）は何ですか？
・良かったこと：飼育しているクラスの担任の先生が不在であったため、回答は得られていない。
・悪かったこと：同上
5．子どもと動物のふれあいの様子（かかわり）について教えて下さい。
・分からない（理由は同上）。セミ、チョウ、チョコマカムシ（子どもが命名）を捕って、その日の降園時には草むらに放している。
6．動物を飼うことを保育へどのように活用していらっしゃいますか？
・分からない（理由は同上）。
7．以前は、幼稚園で、どんな動物を飼育されていましたか？
・今年の４月までウサギを３羽飼育していた。数年前までは鳥がいた。
8．動物を飼えなくなったことで、不便に感じること、困っていること、不都合なことはありますか？
・比較的簡単な虫や魚、カメを飼育していたので、不便に感じたことはない。
9．動物を飼うことができなくなった、ということで他にやってらっしゃることは、ありますか？
・動物がいないからやるというわけではないが、ネオパークオキナワに行くことを計画している。
10．公立幼稚園で、動物を飼育する園が減っているという話を聞くのですが、どう思いますか？
・地域上難しいと思う。
11．動物とかかわる中で、子どもたちにどのような育ちが見えてきますか？
・チョウの成長過程にて、さなぎが羽化しているときに子どもたちが「頑張れ」と応援していた。さなぎを触らないように子ども同士で注意し合ったり、さなぎを台風から守ろうとしたりと、子どもなりに考えている姿を見ることができた。カメの甲羅に石鹸をつけて洗ってしまっていた。
12．これから、他の動物を飼う予定はありますか？
・ウサギを飼育しようと思っている。グッピーを全クラスで飼育しようと考えている。
13．園児数：86名、14．インタビュイーの保育職 職歴：13年

15．追加質問・その他
【追加質問１】ウサギがいたときは、どのようなかかわり方をしていたのですか？
・飼育当番などを決める前になくなってしまった。興味がある子どもや、長期的なかかわりが必要な子と一緒に見ていた。
【追加質問２】今後、ウサギは何羽飼育しようと考えていますか？：２羽
【追加質問３】ウサギはいつ頃からまた飼いはじめるのですか？
・すぐには与えないようにしている。すぐ手に入ると子どもは考えているため、命の大切さを分かるような流れから飼育しようと考えている。
【追加質問４】今後､飼育していこうとしているウサギは保育へどのように活用していこうと考えていますか？
・触れ合い教室も取り入れながら、飼育の仕方や命の大切さを教えていきたいと考えている。
【追加質問５】今後、飼育していこうとしているウサギは当番制にしますか？
・以前もやっていた、先生方のローテーションに合わせて、そのクラスの子どもたちと掃除をしていくことを考えている。
【追加質問６】この地域で、動物を飼育しているなどと聞いたことはありますか？
・Ｌ幼稚園は、カメ、魚を飼育している。Ｍ幼稚園は、グッピー、金魚、闘魚を育てやすいから飼育していた。Ｎ幼稚園では、ウサギ、ニワトリを飼育していた。保育所の方が動物を飼育している。

TableG　E園インタビュー結果

1．幼稚園ではどんな動物を飼育されていますか？
・金魚（6月から）
2．どこで飼育されていますか？
・各保育室と外（玄関先）に4・5匹ずつ飼育している。
3．飼育はどうなさっています？
・やりたい子や不安定な子（引っ込み思案な子）に声をかけて餌やりをしている。これから水槽の掃除を取り入れていく予定。
4．動物を飼育していて、良かったことや悪かったこと（苦労されていること、困ったこと）は何ですか？
・良かったこと：子どもが癒されているような感じがする。遊びを見つけきれない子どもが金魚をじーっと見て、落ち着いている感じがする。金魚が餌を食べている姿をよく観察している。
・悪かったこと：みんなをかかわらせたいが、餌の量は限られているため、餌やりの分担が大変。外の壷にはいたずらをしている。
5．子どもと動物のふれあいの様子（かかわり）について教えて下さい。
・観察している。隣接する小学校にいるウサギとヤギをお散歩に行きながら見ている。
6．動物を飼うことを保育へどのように活用していらっしゃいますか？
・今後取り組んでいく予定である。金魚の絵を掲示し、金魚の歌を歌っている。金魚の絵も描いている。
8．動物を飼えなくなったことで、不便に感じること、困っていること、不都合なことはありますか？
・不便はない。動物の世話をする中で飼育当番や、動物を育てる気持ちなどの生活態度が作られていたが、それが作れなくなった。臭い、汚い経験がなくなってしまった。
9．動物を飼うことができなくなった、ということで他にやってらっしゃることは、ありますか？
・隣接する小学校のヤギとウサギを見に行っている。秋の遠足で動物園に行っている。
10．公立幼稚園で、動物を飼育する園が減っているという話を聞くのですが、どう思いますか？
・残念だが、しかたがないことだと思う。
11．動物とかかわる中で、子どもたちにどのような育ちが見えてきますか？
・以前勤務していた幼稚園に関して：動物が苦手な子が、ウサギと触れ合うコーナーで触ったり、抱っこしたりする中で、愛情表現ができるようになった。動物の世話を進んでやるようになった。
12．これから、他の動物を飼う予定はありますか？
・今のところはない。飼いやすい動物がいれば飼おうと考えている。
13．園児数：250名（0-3歳児90名、4・5歳児160名）、14．インタビュイーの保育職 職歴：22年

15．追加質問・その他
【追加質問1】外の壷にどのようにいたずらをしているのですか？
・葉っぱでつついて、金魚の動きを見ている。
【追加質問2】E園は新設と聞いたのですが、飼育小屋設置の案はなかったのですか？
・詳しいことは分からないが、飼育小屋を立てる案はあった。だが、飼育小屋より子どもたちの遊ぶスペースを優先した。
【追加質問3】この地域で、動物を飼育しているなどと聞いたことはありますか？
・O保育所(閉園)では、魚、金魚を玄関で飼育していた。P幼稚園には、飼育できる環境はあったが、続かなかった。前任の園では、ウサギ、ハムスター、ニワトリ、アヒルを飼育していた。
【追加質問4】幼稚園で動物を飼育することをどう思いますか？
・幼稚園教諭は、多忙で、人手が足りないし、ゆとりがないと思う。命の大切さを伝えるのは難しいと感じる。小学校で飼育している動物は、飼育員がいるからできていると思う。

注）表中に登場しないインタビュー項目は、インタビューを行っていない（項目7）。

TableH　F園インタビュー結果

1．幼稚園ではどんな動物を飼育されていますか？
・ミニブタ（6年目）、ウサギ4羽、ザリガニ、金魚、グッピー、ウーパールーパー、プレコ

2．どこで飼育されていますか？
・ミニブタとウサギは飼育小屋、魚類は玄関の水槽と各保育室、外にビオトープ（グッピー、金魚）

3．飼育はどうなさっています？
・当番はなく、やりたい子がやっている。飼育小屋は先生が中心となって掃除をしている。豚のオシッコ、ウンコは、気づいた子や先生が水で流している。玄関の水槽は、水足しやスポンジ、濾過装置を先生が洗っている。各保育室の金魚は子どもたちが餌やりをしている。玄関に置いている水槽には、ビオトープに生えている藻を先生が入れている。

4．動物を飼育していて、良かったことや悪かったこと（苦労されていること、困ったこと）は何ですか？
・良かったこと：子どもたちがよく見ていて、変化に気づいている（ウーパールーパーのお腹に水が溜まっているのを発見したり、ザリガニの赤ちゃんが生まれているのを発見したり、ブタの逃走に気づいたり、など）。動物への接し方が上手くなった。動物に対して、仲間意識がでてきた（動物をいたわる気持ちが育ってきている）。
・悪かったこと：ブタが子どもの育ててきた朝顔のつぼみを食べてしまった。

5．子どもと動物のふれあいの様子（かかわり）について教えて下さい。
・餌をあげる。

6．動物を飼うことを保育へどのように活用していらっしゃいますか？
・リトミックの動物のマネの時に、ブタの歩き方やウサギのたとえという形で活用している。

7．以前は、幼稚園で、どんな動物を飼育されていましたか？
・ウサギ、グッピー、ザリガニ、ハムスター

10．公立幼稚園で、動物を飼育する園が減っているという話を聞くのですが、どう思いますか？
・入園当初、友達とのかかわりができない子どもは、飼育動物を通じて、心を開いていくことができるが、それができなくなる（減っていく）なら別の手立てを考えなければならない（このような子どもには手立てが必要であり、動物には温かみや命があるため、子どもには響きやすい）。

11．動物とかかわる中で、子どもたちにどのような育ちが見えてきますか？
・好奇心が芽生える。観察を通して、興味関心を育てていきたい。オオゴマダラ調べてみることで、感動が次の小学校での学習意欲へと繋がる。

12．これから、他の動物を飼う予定はありますか？
・ヤゴ（変化していくことを経験させたい）

13．園児数：117名、14．インタビュイーの保育職 職歴：10年

15．追加質問・その他

【追加質問1】動物たちはもともと幼稚園で飼育されていたのですか？
・ブタは家で飼育していた。ザリガニは○幼稚園で捕ってきた（現在3代目）。グッピーとウーパールーパーは保護者が持って来た。

【追加質問2】ブタについて教えて下さい。
・ご飯は給食センターの残飯をあげている。ダイエット中は機嫌が悪い時がある。玄関には入ってこない。近づいてきた場合は、餌をあげながら移動させたり、嫌な音（皿と皿をこすった音）を出して追い出したりしている。ご飯の時に子どもが近づくと怒る。

【追加質問3】ブタの死についてはどう考えていますか？
・死なないと考えている。情が移っているため、死後食べることはない。

注）表中に登場しないインタビュー項目は、インタビューを行っていない（項目8、9）。

Table Ⅰ　G園インタビュー結果（質問１－10）

1．幼稚園ではどんな動物を飼育されていますか？
・金魚、オタマジャクシ、闘魚、グッピー、コオロギ
2．どこで飼育されていますか？
・玄関の水槽、各保育室
3．飼育はどうなさっています？
・玄関の水槽は先生が餌やりや掃除をしている。各保育室の水槽や虫カゴは、子どもたちがお世話をしている。
4．動物を飼育していて、良かったことや悪かったこと（苦労されていること、困ったこと）は何ですか？
・良かったこと：心を育てることができる（優しくなる）。動物を乱暴に扱うと死んでしまうことを知ることができ、動物の扱い方が分かる。動物を擬人化し、探究心が湧き、調べてみようと自らの学習へと繋がる。動物を飼育していると、会話をしなかった子どもが、興味のある動物を通して会話ができるようになる。子どもの良さを見つけることができる。お世話を通して子どもたちの思いが出てくるので、相手の思いや考えを感じることができる。そこから、いろんな考え方や違う考えを受け入れることを学ばせることができる。動物の死を通して、悲しい・辛いという気持ちの話し合いができる。虫に詳しい子どもには「虫博士」と称号を与えることで、子どもは自信を持つことができ、また、認められたと感じることができる。
・悪かったこと：ウサギの死との直面がグロテスクなため、子どもに見せていいのだろうかと悩んだ（子どもにとって深い傷となるかもしれないと、取り扱いが難しかった）。
5．子どもと動物のふれあいの様子（かかわり）について教えて下さい。
・各保育室の動物に対しては餌やりをしている。ウサギがいた時（調査を行った年の夏に亡くなった）は、飼育小屋の掃除を年長児（４・５名）が掃除当番として交代で行っていた。園外保育で捕って来たものを飼育している。子どもが餌がないと気がついたら、一緒に餌を捕りにいく（先生が子どもに気づいてもらえるように導く時もある）。大きいダンボールに流木を置き、カブトムシを放して、木に登ったり、隠れたりする動きを見る。
6．動物を飼うことを保育へどのように活用していらっしゃいますか？
・やんばるという自然の中で、園外保育を行っている。近くの海へ行き、ヤドカリと遊ぶ（天然記念物のため捕獲はしない）。カニを捕まえてきて、保育室で飼育している。川遊びの時にエビを捕まえて、保育室で飼育している。
7．以前は、幼稚園で、どんな動物を飼育されていましたか？
・ウサギ（調査を行った年の夏に亡くなった）、インコ、ブンチョウ、チャボ（20年前、６・７羽飼育）。現在は、鳥を飼っていた飼育小屋は壊している。各クラスにインコがいたが、給食がはじまったと同時に飼育をやめた。また、外で飼育していたチャボは鳥インフルエンザが流行ってからは飼っていない。
8．動物を飼えなくなったことで、不便に感じること、困っていること、不都合なことはありますか？
・不便に感じることはないが、ウサギがいた時には、体に触れると温もりだったり、暖かさだったり、生きているということを実感できていた。また、嫌なら逃げていくため、子どもながらに注意してウサギとかかわっていた。だが、もうウサギがいないため、体験できなくなったのは、もったいないと感じる。インコを飼育しているときは、入園当初かかわりがもてない子や、自分の心の安定がはかれない子、居場所がみつけれない子などが、インコを観察することで、心を開くことができていた。
9．動物を飼うことができなくなった、ということで他にやってらっしゃることは、ありますか？
・特にない。代わりではないが、季節の動物を取り入れている。たとえば、アゲハチョウ、ツバクロヒョウモン、オオゴマダラ、キョウチュクトウスズメガ、モンシロチョウ、シリケンイモリ、ヤマガメコオロギ、セミ、オタマジャクシ、クワガタ、カブトムシ（自宅から持って来たもの）を飼育している。学びの森（森林公園）に行ったり、川にいる魚の観察をしたりしている。
10．公立幼稚園で、動物を飼育する園が減っているという話を聞くのですが、どう思いますか？
・万が一子どもに何かあったらと考えるとためらってしまう。

Table J　G園インタビュー結果（質問11－15）

11. 動物とかかわる中で、子どもたちにどのような育ちが見えてきますか？
・思いやりや優しさ、探究心、自主性が芽生え、自分に自信を持つことができる。友達とのかかわりを持つことができる。自然に興味関心を持つことができる。友達を認めることができる。
12. これから、他の動物を飼う予定はありますか？
・学童保育のウサギが赤ちゃんを生んだら飼おうと思っている。
13. 園児数：76名、14. インタビュイーの保育職 職歴：35年目

15. 追加質問・その他
【追加質問１】動物と子どもとの触れ合いのエピソードはありますか？
・蜘蛛の巣に虫が捕らえられているのを見て、「助けてあげないと！」と言う子どもがいた。虫を助けてあげると同時に、「蜘蛛も生きていかないといけないんだよ」と伝えると、「なら虫戻してあげないと！」というエピソードがあった。
【追加質問２】具体的にどのような園外保育を行っているのですか？
・ネイチャーゲームというものを行っていて、事前にカードのようなものを作っておく。内容は、黄色い花や動物のうんち、キノコ、鳥の巣などを見つけたら○をしていく。
【追加質問３】ヤンバルクイナは見ることはできますか？
・幼稚園では見ることはできない。だが、先生が撮ったヤンバルクイナの写真は見せている。
【その他】　・沖縄県中南部ではザリガニを飼育しているが、沖縄県北部では農業に悪影響がでるということで飼育していない。ザリガニの卵を排水に流すといけない。ミドリガメとタニシは害を及ぼすため飼えなくなった。